

第 1 回浜松学のあり方検討委員会
議事録

- 1 日時 2024 年 12 月 25 日（水）午後 3 時 00 分から
- 2 場所 浜松市役所本館 5 階 庁議室
- 3 出席者 委員 5 名
（下鶴志美委員、井熊正浩委員、小田切徳美委員、高木邦子委員及び
山名副市長（委員長））
事務局 3 名
（企画調整部長、企画課長、企画課長補佐）
- 4 報道関係者 2 名
- 5 概 要 以下のとおり

1 開会

（事務局による司会進行）

2 挨拶

（山名副市長）

本日は、年末のお忙しい中、浜松学のあり方検討委員会ということでお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

本日は、第 1 回目ということで、早速ではございますが、私から簡単に、この委員会設置の経緯についてご紹介をさせていただければと思います。

中野市長は常々、本市は広大な市域を持つということでございまして、それぞれの地域に多くの特色、魅力があるということを申しております。併せて厚い産業基盤、そして温暖な気候と、素晴らしいポテンシャルがあるということを申し述べております。

そうしたポテンシャルがあるにも関わらず、全国の地域と同様に人口減少が進んでおり、この人口減少の流れからぜひ脱却をし、元気なまちにしていきたいという強い思いがあります。

そうした中、元気なまちをつくっていくためには、浜松の将来を背負っていく子どもたちや若い人たちが、生まれ育った地域に愛着を持ち、地域を元気にしたいということで、自ら考えたり、行動したりするようになっていくことが大切ではないかと考えております。また、日ごろ生活をしているとなかなか気付きにくい地域の魅力、地域の素晴らしさ、そうしたものを改めて発見することで、地域への関心が高まって、成長した後にも地域とのつながりを保つことが重要だということでございます。

そこで、この度、このような思いを、地域学と言いますか浜松学として、子どもたちや若者が地域への愛着を育むために必要な要素、コンテンツなどを検討していくために、本検討委員会を立ち上げたものでございます。

初回となる本日ですが、市内の小中学校から大学、民間の事業所におけるさまざまな取組事例、あるいは他都市の事例、そして市内の若者からいただいたご意見、そうしたものを紹介させていただいた後に意見交換を予定しております。皆さまより、忌憚のないご意見をいただければと思います。そうした中で、浜松学のあり方の検討を進めていきたいと思っておりますので、皆さま、各分野の専門的な知見等をお持ちでございまして、この機会にさまざまなご意見をいただければと思います。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。

3 委員紹介

(下鶴委員)

浜松市教育委員会の教育委員で、実は7月1日からまだ半年もたっておりませんが、よろしくお願いいたします。

私は、令和2年度末、令和3年の3月31日まで、小学校の現場にお世話になっていました。長い間、小学校というある意味特定の場所に身を置いていましたので、皆さまのように経験豊かで、また、広い視野で物事を見つめることができるか大変不安でございまして、少しでも浜松学のあり方の検討に役に立てばと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(井熊委員)

はい。井熊正浩と申します。どうぞよろしくお願いいたします。浜松商工会議所の情報文化部会長として出席をさせていただいております。仕事はこの近くにあります静岡エフエム放送株式会社というラジオ局の代表をしております。この会社の新卒の2期生、もっと言いますと、私は浜松に生まれて、大学の4年間以外は全て静岡県で過ごしております。浜松は、好きか嫌いかわねれば、大好きでございまして。そんな自分の経験や思いが少しでもお役に立てればうれしいなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(小田切委員)

明治大学の小田切でございます。

私は大学で地域再生論と名乗っておりますが、政策的に言えば地方創生の研究をしております。地域の内発的発展が必要だという議論をしておりますので、そのためには人材の育成が何よりも基盤になるという、そんな議論をしております。ふるさと教育にその観点から非常に関心を持っております。

実は、教育関係はもちろん直接の専門ではないですが、そのようなことから中央教育審議会の「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」や、「高校と地

域をつなぐ人材の在り方に関する研究会」、また、今、参加しておりますが「社会教育の在り方に関する特別部会」で社会教育の見直しに加わっております。そういう意味で、直接の専門ではないにしろ、こんな議論をさせていただいているということでございます。よろしくお願いします。

（高木委員）

静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科教授で、教職課程を担当しております高木と申します。実は私、浜松生まれではなく就職でご縁があって浜松に参りました。もうすぐ20年ぐらいになりますが、家も構えまして、これからは浜松でお世話になることになります。ただ、そういう意味では、よそ者から見た浜松の良さみたいなものもわかってはいるつもりです。

また、静岡文化芸術大学というのは、学生が地域連携の活動を一生懸命やっています、学生がすごく楽しそうにやっていて、そのまま浜松で就職する子も確かにいますので、そのあたりの情報を収集して、こちらに還元できたらなと思っています。よろしくお願いします。

4 浜松学のあり方検討について（概要）

（事務局から資料1に基づき説明）

5 議事

（1）市内・他都市における取組事例の報告

① 浜松市内の事例 【資料2】

② 他都市事例 【資料3】

③ 若者の意見 【資料4】

（事務局から資料2～4に基づき説明）

（委員長（山名副市長）による司会進行）

（2）意見交換

（委員長（山名副市長）による司会進行）

<意見交換テーマ>

① 市内や他都市における取組事例や若者の意見を踏まえての所感や関連する事例等
（下鶴委員）

たくさんの資料のご準備大変だったと思います。改めて、いろいろなことをいろいろな場所、目的意識を持ってやっているのだなということを感じたのが、まず、第一の感想でございます。もう既に総合的学習の時間の事例などのお話があったかと思

いますが、私からは、小学校、中学校を通してやっていたことなどをご紹介します。
ただきたいと思います。

まず子どもたちに、地域愛を育むというための方策というのは、さまざまな取組が見られるなと感じています。本日の説明にもありましたように、総合的な学習だとかキャリア教育だとか、また学校の教育活動全体で、本当にそれぞれの学校が、その地域ならではの特色を活かした教育活動を展開しているのではないかと考えています。

子どもたちにとって一番身近な社会、それは地域なのですね。自分が生まれて自分が住んでいる。自分が育って、そして今、自分が生きている。そんな地域を学びのフィールドとして考えていくという、これは言うまでもなく、子どもたちの主体的な学びにつながりますし、積極的に社会に参画しようとする、そういう態度を育むものにつながるのではないかなと考えています。

教諭をやりながら行政にもいたことがあり、何年か前に学校訪問をする機会がありました。その学校訪問をする際に、私は必ず学校経営書とならびにグランドデザインに目を通して行きます。そうすると、ある中学校区であります、中学校区で育てたい子ども像というのを明確に示されている中学校区があります。その地域で小中の連携を主軸にして、この地域でこういう子どもを育てていこうという明確なビジョンが打ち出されていきました。少し紹介します。例えば、「人が好き、学校が好き、このまちが好き。」、これを合言葉にしている中学校区があります。それから「〇〇」、〇〇にはまちの名前が入っていますが、今日は例えば浜松とします。「浜松を誇りとし、夢や希望に向け粘り強く努力をする子どもの育成」とか、「浜松の未来を担い、夢を持って自分らしく輝く子」。それから、「人々の幸せや地域の発展のために貢献する人」、まさに地域発展まで視野に入れて人づくりをしていこうということです。地域で学ぶこと、地域を学ぶこと、そして地域のよさを体得して、そのまちを誇りに思う。そんな人材づくりの基盤を、小中学校でやっているのかなと改めて感じました。私の実践ではないですが、とても魅力的な取組をしている学校があったので紹介させてください。それは「〇〇未来研究所」というテーマを掲げている中学校があります。例えばそこは地域名が入るのですが、今日はあえて「浜松未来研究所」というテーマで説明したいと思います。20年後のこのまちをもっと元気に、そのためにどんなことが必要かということを考えていくということなのですね。その発端は実はアンケートからだったそうです。令和4年度のアンケートで、「今住んでいる地域の行事に参加していますか。」という質問に、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」という回答が、この学校は80%以上で、全国平均を大幅に上回っています。「地域や社会をより良くするために、何をすべきかを考えることがありますか。」という問いに、「ある」と答えたのが45.2%でして、これは全国平均並みだそうです。その学校は独自のアンケートを実施したそうです。「将来はこの地区から離れた場所で生活するであろう。」という問いに対し、子どもたち75%が「そうだ」と答えたそうです。将来はこのまちでな

く他地区、他都市で生活しているではないかということです。先生たちは何とかこれを盛り上げようと考え、自分たちの住むこの地域に愛着をもち、この地域の 20 年後のあり方を、中学生に本気で考えさせたい。それがこの〇〇未来研究所、浜松未来研究所だったわけです。20 年後も元気な地域にしよう。そのためには、「今私ができることを考えよう」というテーマ設定で取り組んだそうです。その設定がまた楽しいもので、中学生の所長がおり、そして健康部長、環境部長、産業部長の 3 つの部長がいます。健康部には 3 つの課があります。防災課、災害に強いまちづくりはどうしたらいいのだろう。福祉課、誰もが笑顔で暮らせるまちにするにはどうしたらいいのだろう。健康課、この地域の人々がもっと健康に暮らすためにできることは何だろうか。環境部にも 3 つの課があります。観光課、観光地としての知名度を上げてもっと観光客を増やそう。浜名湖課、浜名湖をよりよくするためには何をすればいいか。テクノロジー課、この地区で Society5.0 を実現するためには何ができるか。産業部にも 3 つの課があります。歴史課、この地域にはどのような歴史があって、どうしたらそれを受け継ぐことができるか。花と緑課、花と緑でこの地区をあふれさせるためには中学生の私たちがどうしたらいいか。グルメ課、20 年後まで人気が残るこの地域の特産物を活かしたグルメの開発。そういったことを子どもたちが、知恵を出し合って取り組んでいったということです。

実際の活動は、福祉課は、独居高齢者宅へ中学生が訪問をして元気づけたり、健康課では、地域住民対象の健康講座を実施したり、幼稚園の子どもたちから高齢者まで楽しめるエアロビクスの開発をしました。観光課では、地域店舗の紙袋のデザインも考えたということです。もちろんそこには中学生だけでなく、アドバイザーの人たちの協力があったということです。消防署の人とか、サッカーチームのチームドクターだとか、地域のお菓子屋さん、観光協会の人々が子どもたち、中学生の主体的な学びを地域や企業が後押しし、みんなで一丸となって、地域の 20 年後を語り、そして実現を図っていく。活性化を図っていく。地域で学ぶ、地域を学ぶ、地域のよさ、魅力発見ということだったなと思います。そして、子どもたちも元気なのですが、その時手助けしているアドバイザーの方たちも、本当に幸せ感、互いに Win-Win の関係づくりがあるということを、校長先生はお話しをされていました。

子どもたちが地域とつながるという心の育成にも、大きな影響を及ぼしているのではないかなと思っています。まさに 20 年後が本当に楽しみな取組だったなということで、私の実践ではないですが、その取組を紹介させていただきました。以上です。長くなってすみませんでした。

(井熊委員)

たくさんの資料をご用意いただき、ご説明をいただき、単純に私の感想ですが、たくさんの取組、他都市の取組を参考にして、いろいろやられていて感銘を受けました。ここまでよくぞいろいろ取り組んでいただいているなと思いました。

それにもかかわらず、どうして人が減っているのだろうという非常に素朴な疑問をもっております。この若者たちの意見のデータを見ますと成果は出ていますね。「好きだ」ということで考えると、その辺文句が出るようなものはないですね。ですから、逆に言うと、どうしたらいいのだろうというふうに思いました。ただ、この若者の意見の中の10ページの若者の地域への愛着の状況の中で、赤枠で囲ってある「浜松に愛着があるから」という意見のなかで、年齢が上がるにつれて下がっているのは少し気になりました。なぜだろう、じゃあどうしたらいいのだろうということですね。この愛着があるからというものを、それぞれの世代別に上げていく作業というのは、不断の努力で必要なだろうと素直に感じました。副市長のお話を伺うと、やはり東京とか大阪とか大都市圏に進学した方々が帰って来ないのです。だから人が減っている。一般論で考えたときに、この問題と少し違う要素もあるのだろうと思っています。

愛着ということ言えば、子どもたちについてのアプローチは今のやり方を続けて行く。さらにもっと増やしていく、厚くしていくということで、いろいろと成果も上がると思いますが、もう少し現実的な問題として、例えば、生活コストと収入とのバランスを考えたら、東京に住むより浜松でいいところで働いて、生活を謳歌したほうがいいよというような、非常に現実的な話になりますけれど、そういったアプローチも必要になってくるのだろうと思います。

一番の問題は、女性が帰ってきてくれないところに問題があるのだろうと思っています。彼女たちが働きたい職場がないことが問題だろうとか、いろいろなことが考えられますので、より現実的な対応をとっていく中で、われわれはここでどんなお話をすればいいのかということを、少し悩みながら聞いておりました。以上でございます。

(小田切委員)

私も今回のこの資料を拝見して、よくぞここまで調べていただいたなと思っております。今回のこの浜松学ということだけでなく、市の大きな財産ができたのではないかなと思って、まずご苦労様と申し上げたいと思います。

その上で2つ、ここで議論させていただきたいのですが、1つは、この浜松学をふるさと教育というふうに言っていいいでしょうか。そういうふうに矮小化してはいけないのかもしれませんが、おそらく一般的に言えばふるさと教育ということだろうと思います。

ご存じのように、ふるさと教育は特に島根県で先発したと言われています。島根県の場合には、各市町村が取り組むときに、県庁から交付金、補助金が出て支援をしています。そして、最終的には各小中学校が取り組む、それこそがふるさと教育ということになっております。

今回、浜松学というものを設定するというのは、そこに何かしらの共通テーマを設定するということだと思います。本来小中学校単位でやるべきものであるのですが、そこで浜松という共通テーマを設定することになると、大変魅力的なものであると同時に、おそらく2つの困難性があるなと思っております。

1つは、調べていただいた他の地域で見ていただくとわかるのですが、もちろん北九州市も政令指定都市ですが、それを除けば小規模でして、人口規模で言えば、例えば上伊那広域連合は20万いてないと思いますので、その点で人口が比較的小さなところで取り組んでいる事例だろうと思います。80万都市の浜松市が取り組んで、なおかつ政令指定都市の中で私が実感するところ、おそらく一番多様性があると感じます。政令指定都市はどこでも、農村地域を抱えていることは間違いないですが、浜松市は何と言っても本格的な中山間地域から、県境から高度な工業地域まであり、多様性があるということで、共通テーマをどのように設定するのかという問題・課題が1つあると思います。

それから2つは、人口に高い流動性があるということです。小規模町村であれば、人口流出を止めると言いましょうか、転出しないでいただくような郷土教育はどうあるべきなのか、あるいは、そこに呼び込むような郷土教育はどうあるべきなのかということです。そもそも流動性が高いということは、入って出て行く人も含めて浜松に永続的に関わっていただくような、そういう方々をどういうふうにつくっていくかが重要です。おそらく他の市町村とは違う、いわば関係人口づくりというテーマが浜松学の中には出てくるのかなと思います。そういう意味ではモデルなき浜松学と言いましょうか、ここで初めてつくり上げるものが浜松学かなと感じております。

それから2番目に、先ほども少し申し上げましたが、高校魅力化の話を少しさせていただきます。これも島根県のことです。ご存じのように海士町から進んで島根県全域に広がって、今は全国各地で進んでおります。佐久間分校は高校魅力化の対象で、浜松市内でも行われているということです。島根県でも研究がございまして、高校魅力化している高校とそうでない高校の生徒に何の違いがあるのかという分析があります。これは非常に重要な研究結果なのですが、その中で一番高いギャップがあるものは、つまり普通の高校と魅力化高校の違いは、チャレンジ精神が旺盛だということです。これは理解できるのですが、実は3番目に、これは私自身大変驚いたのですが、親や学校の先生以外に気軽に話せる大人がいるという、ここに大きな違いが出てきております。高校魅力化というのは、何をやっているのかと、そこから解釈すると、大人のネットワークに高校生が接続していると考えることができて、そのことが、将来その高校生が東京に出て行く、名古屋に出て行ってしまう。しかし、戻ってくるときに相談相手になるなど、大変重要な成果がそこに出るのではないかと思います。その意味で浜松学ということになると、学ぶ、体験するということなのですが、大人と対話をするという要素を意図的に入れていくことが必要になって

いくのだと思います。対話することによって、地域の中にネットワークができ、そのネットワーク自体が、出て行った方々も、あるいは入る方々も新しい要素になっていく。そんなふうに考えると、いくつかのヒントがあるかなと思います。もう少し詰める必要がありますが、そんなふうに考えております。以上です。

（高木委員）

大学生が浜松に進学で初めてやって来て、学生の中には、浜松って富士山見えないのですねっていうぐらい、ドーンと見えると思ったのに見えなかったみたいなことを言うぐらい、すごく遠くから来ている子もいます。「住んでみるといいところだ。」というのはみんな言います。ただ、「好きだが、就職はまた別の話。」というふうになってしまうのが、たまに来られる場所であればいいといいますか、交通の便がいいのが逆に災いしているのかなと思うこともあります。学生は、就職は東京とか名古屋とか大阪とかで、浜松には友達がいるから帰って来て、時々遊びに来る場所として考えています。富山に行こうが鳥取に行こうが、ここへ帰って来る子はいます。自宅はまた別のところにあることが多いです。そういう井熊委員の「魅力はあるが働き口がない。」とおっしゃったとおりのことを学生の口から聞きました。「私のやりたい仕事は浜松ではできないのだ。」そういう言い方を結構するなというのが印象としてありましたので、井熊委員の話はその通りと思って聞いていました。ただ、先ほども申し上げましたとおり、うちの大学の学生は、わりと地域に入って行っているいろいろな活動をするのですけれど、出身地がどこであれ地域の人と濃いつながりができると、ここで働こうかなというふうにだんだん変わっていくのですね。

私は教職課程で教員養成をしています。教育委員会が学校インターンシップというのを始めてくださって、教員になりたい子に、教育実習とは別に学校へ行って先生の後を付いて回るインターンシップをさせていただきます。学生が、浜松市の教員採用試験を受けようかなと思ってインターンシップへ行くのですが、インターンシップをしていくうちに、浜松市の教員になりたいと変わっていくのですね。地元、地域とのつながり、ネットワークというのも、先ほど小田切先生がおっしゃったこととも近いかと思うのですが、それをつくる機会があるというのは、大事なことはないかなと思います。

私は、いろいろな中学校で学校評議員もやらせていただいています。野口町では浜松まつりに中学生を戦力として参加させます。その中学生の子どもたちが本当によく働いて、大人からも褒められ、大人と対等に会話をし、その中で地元の人との関係ができてくるといふ、すごく素晴らしい事例も伺いました。そういう子たちはきっと大好きな地元で、何か地元のためにと考える子もいるのかなと考えました。

もう1つありまして、今いる若者を浜松に留めるといふ方向と、1回外に出た若者を戻すというちょっと違うアプローチがあるかなと思います。他都市の事例を拝見すると、上伊那はおそらく数少ない人しかいないからこの子たちを育てようということ

で、キャリア教育なのではないかなと思います。おそらく人口は増えない、日本中どこでも人が減っているので取り合いになりますね。取り合いになるから減って行くかもしれないけど、少しでもそこでうまく回せるような人を育てるというアプローチなのではないかとは思いました。1回出た若者に戻って来てもらうためには、浜松にいるうちに浜松の誇りととにかく育てることが必要だと思います。うちの学生は留学して帰って来たら「日本が良かった。」と言いますし、私自身は岐阜県の関ヶ原町というところ出身なのですが、すごく歴史の話とか郷土教育に熱心です。これが普通だと思っていたのですが、関ヶ原町の人間はみんな、外へ行くと関ヶ原合戦の語りができるくらい徹底的に教え込まれるのですけれど、外へ行って、その話をする事で、自分の地元を再発見します。それで最近リターンをする子も出てきていて、少しまちが活性化されます。私も帰ろうかなと思う子も出てきます。それから、老後はここでというふうになっていくことがあるなという話を最近同級生としました。今地元を大好きな子たちが出て行ってしまったからといって、永遠に見向きもしてくれないわけではないのかなと思います。少し期待のある「大好きだ」というアンケート結果を見て、老後は帰って来るかもしれないという期待がもてるなと思いました。

以上です。

<意見交換テーマ>

② 若者に浜松への愛着をもってもらうために重要なことや必要な要素 (高木委員)

私は愛着をもってもらうためには、先ほど関ヶ原の事例を出しましたが、やはり社会科、浜松市は歴史も産業もすごく自慢できることがたくさんありますね。総合的な学習の時間もリンクをしていると思うのですが、浜松ってこんなにすごいのだぞということをもっと誇れるような授業、特別な副読本があるということは、そういう授業をされているのかなとも思います。子どもたちが語る場に立ち会ってみたいなと思いました。浜松のすごいところを言葉で語れることによって、彼ら自身も再確認していくことになりますので、浜松のすごいところを語らせるとか、浜松は転校生も多そうですが、よそから来た子に、浜松市ってどう見えているかというのをシェアせるとか、そういう話し合いをする中で、浜松のすごいところが語れる子になるといいと思いました。

以上です。

(小田切委員)

先ほどの話の補足的なことを3点ばかりお伝えします。小さな話からなのですが、1つ目は、3年前から必修化が始まった地理総合という科目です。地理というのは暗記科目で教わってきて、地理が大嫌いな学生ばかりです。今われわれの大学では社会の中で地理受験者が一番少ないのですね。それが当たり前になっているわけなのです

が、地理総合というのは、地理とは違って、私たちはむしろこれは地域学と名乗った方がいいのではないかというぐらい内容が変わっているはずなのですね。例えば SDGs の展開が地域でどのように起こっているのかとか、GIS を使って地域を調べてみるとか、そんなテーマになっております。ただ、残念ながら地理がそういうふうな状況だということもあって、地理の専門の先生がいないので、現実には教えているのは歴史の先生だという話も聞いております。そういう意味では、現実には成功しているかはともかくとして、地理が変わりました。地理総合になることによって地域を学ぶという学問に変わったという、そこがどうなっているのかというのは、調べていだろうと思います。先ほど言いましたように、現実にはできていない可能性はありますが、地理総合という科目があるということを改めて確認させていただきます。

2 番目は、浜松学で何をするのかということです。端的に言えば何を教えるのかということが重要であると同時に、それをどう実現するのかという What ではなく How の部分も議論する必要があると思います。先ほども繰り返し申し上げて恐縮なのですが、高校魅力化を議論するとき、確かに高校魅力化は素晴らしい、ただし、それをどう実現するのかという話になったときに、現実には地域の現場を見ると、二人のコーディネーターが必要だと言われております。各高校の先生は本当に忙しい中で、高校の魅力化なんてできるはずがありません。そういう意味では、その高校の魅力化を担当するようなコーディネーターや、あるいはそれを直接に行うことができる先生が必要だということです。

一方、地域との接続を高校魅力化が行っているわけなのですが、行政サイドでも、あるいは地域サイドでもコーディネーターが必要で、この 2 人のコーディネーターがいない限り、高校魅力化というのは実現できない。このように、何をすればいいのかわかったけど、どうすればいいのかの部分がいままでの議論で欠けています。具体的には、ここには財政支援が必要になるということもあって、そういう意味では、浜松学を名乗るからには、どのようにそれを実現するのかというその部分を財政も含めて、先ほどのように人材配置も含めて必要になってくるのだらうと思います。その議論が、かなり重要なのではないかなと思っています。

最後 3 点目ですが、井熊委員からもあった話で、私も共感するのですが、人口減少についての話です。最近ではこういう言い方をしています。人口減少というのはある種予想された話であって、そうであれば人口減少に対しての緩和という議論もありますが、むしろ人口減少に適応することが必要です。人口減少社会の中でどのように幸せに生きて行くのか、そこを議論することが重要だということを言っております。

各地を歩くと、確かにそこに適応しているような、例えば浜松でも天竜区の中で佐久間とか、あるいは皆さまご存じの熊とか、そういうところではそういった動きがあって、こういった地域を私はにぎやかな過疎、過疎地域だけなぜかにぎやかなのだという、まさに人口減少に適応した形で、新しい社会づくりが行われています。もち

ろん厳しさはあるわけですが、そういったところを考えるべきではないかと思いません。

そうするとスローガンは、「人口減、人材増」で、人口減ですが、人材をどう増やすのかということで、そのために、人口減に抗したような人材をどのように増やしていくのか、と考えると浜松学のテーマも、人口を引き止めるというよりも、少ない中で幸せに生きて行くような、そんなスキルを持った人材という、このような設定の仕方もあるのかなと思います。以上です。

（井熊委員）

若者に浜松への愛着を持ってもらうために重要なこと必要な要素は、自分の経験でお話ししますが、何と言っても「のびゆく浜松」だと思います。あの存在は自分の人生の中でも非常に大きな存在だったなと思っています。金原明善翁これほど偉い人が浜松にいたのだというのは、いまだに心の中に残っておりますし、本田宗一郎が二俣で生まれ、浜松に出てきて大きな会社を興したというのは、子ども心に残っています。今考えてみると、あれだけいい副読本があって、学校で教えていただきましたが、もっとこうすればよかったなと思うのは、自分が大人になってみて、例えば、私は以前県産材の振興委員会の評議員をやらせていただいたのですが、実際に天竜美林、そこでの木の伐採を間近で見せていただいて、ああ、金原明善が育てた木がこうなって、こんないっぱいになっているのだ、すごいなあというのは、実際に目で見て体験して、もっと自分のためになるというか身になったなと思います。以前『ブラタモリ』というテレビ番組が浜松に来て、東照宮のところを見て、ここにどうしてこんな段差があるとか、これは実は天竜川が昔蛇行していてここまで来て、あれは浸食岸であるなど、映像で見たから実際に自分もそう思いました。小田切先生がおっしゃったように、実際にフィードバックとか、かねがねそういったものがあったって、それを実際に説明できるコーディネーターさんがいるということ、つまり人材は重要ですよ。だから、実際にその基準の学問だけではなくて、それを実践できる人材をどう育成するかということが、大きな課題になるのではないかと思います。

余談になりますが、実は私、静岡県サイクルツーリズム協議会の代表理事をやっております。今一番の課題で、サイクリングに非常に求められているのは、ガイドライドと言って地域に非常に精通しているガイドが1人必要です。一緒に走るというのが一番大変なのです。でもこのガイドがなかなかいないです。地域を知っていて、地域を好きでいろいろわかる人間が必要です。人材の育成、これは重要だと思います。

（下鶴委員）

「のびゆく浜松」のお話が出まして、教育も1つ役に立っているのだなということを感じました。

これも一つの事例なのですが、金原明善とか本田宗一郎、賀茂真淵、国学者ですね。実は私が初めて校長で赴任した学校でのお話です。ある朝、正門で立ってあいさ

つをしていると、小学校2年生の男の子が、私のところへ来まして、「おはようございます。校長先生、今日は何の日か知っていますか。」と聞くのです。私は、「今日はあなたのお誕生日？」と聞きますと、「違います。」「お姉ちゃんの誕生日？」と聞いていったわけですね。そうしたら、「違います。今日は賀茂真淵の誕生日なのです。それは、ここの小学校の人はみんな知っていますよ」と言われたのです。そして賀茂真淵の座像に会釈をして校舎の中に入っていました。私はここに赴任した以上、もう一度賀茂真淵をひもといで勉強しないといけないと、この子たちにとって、偉人、先人が心の支えとなり、自分たちの自慢として誇りを持っている。それはその小学校2年生のあの子の輝きでも十分わかったわけです。そのときに本当に、はっと思いました。これは財産なのだというのを感じました。

その学校でもう1つ事例があります。林間学校のことです。林間学校である山の頂上に施設があるものですから、麓までバスで行って、そこから歩いて行くわけです。リュックを背負って汗だくになって、30分、40分歩いてやっと宿舎に着くわけです。頂上に着いた途端に、子どもたちは私に「校長先生」って駆け寄って来たわけです。私は「お茶を飲んでいいですか。」「お水飲んでいいですか。」などの質問があるのではないかなと思ったのです。そしたらなんと子どもたちが私に言ったことが、汗だくの顔をして、「和歌をつくっていいですか。」って言ったのです。私は本当にびっくりしました。この感動をすぐ歌で表したいと思える。それはもう生活の一部になっているのだということ、先人からの贈り物は、未来への預かりものなのだというのを、まさに校長として自覚をして、これは大切にしなければいけないということを感じた次第です。それが1つの事例です。

もう1つは人材とか、先ほどにぎやかな過疎という話がありました。違う会合でも話ししたのですが、北遠の小学校の児童数がどんどん減って行ってしまう。でも、これをなんとかしたいと子どもたちが思ったのだでしょうね。僕たちの学校のよさ、僕たちのまちのよさを、もっとみんなに広めてわかってもらって呼び込もうということ考えたようなのです。実は私が退職して2年たってからですか、北遠のまちの方に行きまして、山あいの食堂でお昼を食べました。レジをした最後に帰ろうとしたその横に、このパンフレットがあったのです。「住もうよ〇〇」「通おう〇〇小学校へ」。私はひと目見てすぐ、これは子どもたちがつくったのだなとわかりました。そこにはつぶさに自分たちの生活を見つめて、全校児童は三十何名で少ないですが、僕たちの学校の4つの魅力というのを、ちゃんとわかって発信しているのです。そして、そのパンフレットを地域の皆さまが、学校だけでなくいろいろなところに置いたらどうだと言ってくださり、店に置いたり、いろいろな場所に置いたりということをしたのだそうです。子どもたちが自分のまちの魅力とか、学校の魅力、それを発信できることは、先ほど高木さんがおっしゃいましたが、それは本物だと思っています。だから子どもたちには、ありったけの地域の自慢できるものを教え、子どもたちが体得し

て、それを大人になっても忘れないというか、そんな教育をこれからもやっていかなければいけないかなと思いました。私もずっと浜松ではなく、大学は東京へ行っていました。4年過ぎて帰って来ました。離れてみて、浜松の素晴らしさというものはひしひしと感じました。それはやはり人の温かさであったり、温かさを感じる心地よさであったり、人材の素晴らしさであったりということを感じたものです。以上です。

6 閉会

（事務局）

以上をもちまして、本日の内容は終了となります。長時間にわたり、活発なご議論をいただきまして、誠にありがとうございました。本日の議事録につきましては、文書にて報告をさせていただきます。

次回の日程ですが、来年3月頃を予定しております。詳細につきましては、改めてご連絡を申し上げます。

これをもちまして、第1回浜松学のあり方検討委員会を閉会いたします。ありがとうございました。

（終了）